



優駿会同窓会会報

獣医・畜産・応用動物 同窓会（関連講座含む）

H26.9

（1）平成 25 年度（2013 年度）優駿会同窓会開催報告

平成 25 年 11 月 23 日（土曜）、東京大学農学部 フードサイエンス棟中島ホールにて優駿会同窓会が開催された。本年度は、同窓会総会を冒頭の 1 時間を使って開催し、今後の同窓会のあり方について討議された。総会に引き続き新しい企画として国内外で活躍されている同窓生ならびに本学教員による講演会を開催し、最後に、中島ホールエントランスホールにて懇親会を開催した（参加者 42 名）。

同窓会総会

同窓会総会では、今後の優駿会の活動方針などについて討議された。また、駒場農学校に日本で初めて動物病院を開設した日本の獣医臨床学の祖である、ヤンソン博士の銅像修復と動物医療センター玄関口への移設について話し合われた。以下、その要約を記載する。

- a) 優駿会は『獣医・畜産・応用動物科学各専攻の卒業生・修了生と在籍中の教員・学生・大学院生とのコミュニティの育成と展開を図る』ことを目的とすることが承認された。
- b) 全学的に展開されている赤門学友会の傘下に参加し、提供されるメディアやサービスを上手く活用していくことが認められた。今後、傘下参加に向けて活動を開始する。HP などの充実・活用を積極的に行う。
- c) 上記 a) を実現するために、年 1 回開催される同窓会をよりアクティブな企画を考案し、若い年齢層の同窓生の参加を誘引する。
- d) 「ヤンソン賞」を設置し、海外で活躍する同窓生、社会で活躍する女性同窓生、東大内で活躍する教員や研究員、学部講師などを推薦・選出して講演会を開催する。
- e) 現在の同窓会会費制度は 30,000 円を上限の終身会員制度であるが、これでは毎年一定の会費収入見込みがしづらく、同窓会活動の活性化のためには毎年一定額の安定した会費支払制度が望ましい。来年度の新規同窓生からは制度を変えて一律 3,000 円の会費制度とする。
- f) 優駿会の運営は定期的に（2，3 年ごと）研究室持ち回り制度にしてはどうか？
- g) 本来同窓会から会長と副会長を選出するべきではないか？

- h) 優駿会同窓会費用を使ってヤンソン先生像の修復と動物医療センター玄関口への移設にすることが承認された。
- i) 平成 24 年度同窓会収支決算について承認された。
- ※a)～e)については承認を得た。今年度から赤門学友会への加入の準備をする。また、新規同窓生からは一律 3,000 円の年会費とし、これまでの同窓生は旧制度のまま同窓会費を徴収する。f)～g)については同窓会会則の変更が必要であり、しばらく様子を見て再度検討する。h)ヤンソン先生については添付の資料を参照。

講演会

本年度は下記の同窓生を同窓会として推薦し講演をお願いした。また、第 1 回ヤンソン賞受賞者として表彰された。(敬称略)

寺部正記 (応用動物科学専攻博士課程中退) 米国 NIH National Cancer Institute

『癌免疫療法の最新事情について』

応用動物科学専攻博士課程中途退学後、1999 年に松本芳嗣先生、小野寺節先生のご指導のもと学位取得。その後米国 NIH の National Cancer Institute にて visiting fellow, research fellow を経て 2007 年より Deputy Section Chief, Associate Scientist。

(講演内容) 近年日本でも話題となっている、ガン免疫療法についてそのコンセプト及び最新事情と、抗腫瘍免疫における NKT 細胞の役割を中心に、我々の研究成果を紹介する。

前田(豊崎)朋子 (獣医学科卒業) 塩野義製薬 (株) 創薬研究所

『製薬企業における獣医学・応用動物学教育の価値』

東京大学農学部獣医微生物学教室卒業 (見上彪教授)。塩野義製薬 (株) 創薬研究所、Massachusetts 大 Center for Infectious Disease 留学をへて、現職。

(講演内容) 製薬企業における獣医学並びに応用動物科学を専攻した者のキャリアを俯瞰するとともに、企業の創薬研究や医薬品開発における獣医学・応用動物学教育の価値とその将来展望について、自身のこれまでの経験も含めて紹介したい。

金井克晃 (獣医解剖学教室 准教授)

『SRV/SOX 遺伝子と細胞/組織分化の運命決定』

東京大学農学部卒業後、獣医解剖学教室にて西田隆雄先生、林良博先生のご指導のもと学位を取得。三菱化学生命科学研究所、(財) 東京都臨床医学総合研究所、豪州 Queensland 大学をへて、1999 年より出身研究室である現所属に復帰。

(講演内容) 哺乳類の Y 染色体上の性決定遺伝子 SRV とその関連遺伝子である SOX 遺伝子による細胞・組織の運命決定のメカニズムについて、獣医解剖学教室で行われた教育研究の成果の一部を紹介する。

早川晃司 (細胞生化学研究室 特任助教)

『創薬と再生医療を目指した幹細胞からの神経細胞の再生』

平成 22 年 3 月応用動物科学専攻博士課程修了(指導教官・塩田邦郎教授)、現在同専攻に特任助教として所属。

(講演内容) 本会では、最近我々が報告した、多能性幹細胞からの睡眠を司る

オレキシン神経誘導、およびそのエピジェネティクス制御について紹介する。加えて、この細胞を用いた今後の展望についても議論したい。

※上記4名の同窓生には第1回ヤンソン賞の表彰と副賞を授与した。

懇親会

講演会に引き続き、中島ホール横のフードサイエンス棟エントランスホールにて懇親会が開催された。塩田会長初め、参加頂いた同窓生にご挨拶を頂くとともに、盛大な同窓会懇親会となった。

(2) ヤンソン先生像の修復と移設について

- 現在、弥生キャンパス農学部3号館2階エレベーター脇にある「ヤンソン先生像」を、同キャンパス動物医療センター玄関脇植え込みに移設する。
- ヤンソン先生の生涯・業績を記した銘板も作製する。
- 修理・洗浄、移設、銘板作製の見積額は69.3万円で、これに基礎工事費が加算される（見積もり中）。総費用は優駿会同窓会費から支出する。
- 除幕式の際に記念シンポジウムと懇親会を行う。

ヤンソン

JANSON, Johannes Ludwig (1849~1914)

嘉永2年(1849)1月9日にドイツ国バーデンバーデンに生まれ、大正3年(1914)10月28日に日本国鹿児島県で死去、享年65歳。獣医師、ドイツ陸軍獣医官、基礎医学者。

ヨハン・フランツ・ヤンソンとシャルロッテ・ヨハンナの息子。ドイツ国ブラウンシュワイグ(Braunschweig)の出身。明治34年(1901)日本国鹿児島県出身の谷口ハルと結婚、娘二人・息子一人。

【学歴】 慶応2年(1866)に中学校を卒業の後、慶応2年~明治2年(1866~1869)の間ベルリン獣医学校で獣医学を学ぶ。

【経歴】 明治2年(1869)に獣医学校を卒業後、開業獣医師の免許を得、陸軍獣医師となる。同年、牛疫の防疫のためロシア国境に送られる。明治3~4年(1870~1871)仏普戦争中、約1年間第六大砲大隊所属の陸軍獣医師としてパリに滞在した。明治4年(1871)ベルリン大学医学部のルドルフ・ヴィルヒョウが研究を行っていた病理学研究室に入り、病理解剖学を学んだ。明治6年(1873)から開業獣医師として働いた。

その後、フリードリヒ・ウィルヘルム厩舎を経由してベルリン大学に入り、解剖学、組織学、生理学、外科学を学んだ。明治10年(1877)ベルリン獣医学校の助教授となり、より高い公務員の地位を得、教師としての免許を得た。

明治7年(1874)日本政府は東京に農学校を設立することを決め、獣医学の最初の外国人教師として明治9年(1876)に英国からジョン・アダム・マックブライド(John Adam McBRIDE)を招聘した。彼は契約に基づき3年間日本に滞在し(明治12年10月まで帝国農科大学獣医学科主任)、明治13年(1880)年に日本を去った。ヤンソンはマックブライドの後継者として、明治14年(1881)に日本に到着した。

【日本における貢献】 解剖学、病理解剖学、内科学、外科学、伝染病学、防疫学、乳肉検査、飼育学、産科学、寄生虫病学と、病院での臨床実習を教えた。同年ドイツ国から到着したトロエステル(TROESTER)は、生理学、薬理学、眼科学、組織学、蹄病学、装蹄学、ラテン語を教えた。授業は英語で行われ、通訳官杉田武らにより通訳された。ヤンソンが日本に到着した明治14年(1881)11月1日に駒場農学校の動物病院が開かれ、新しい病院で西洋式の器具により獣医臨床を教えた。また、日本語で書かれた最初の獣医学教科書「家畜醫範」を校閲した。これらの教科書は駒場農学校の卒業生によって書かれ、和紙に木版で印刷され、各3巻の解剖学、生理学、薬物学、内科学と、各2巻の外科学、産科学からなっていた。

当時、日本政府は西洋文化の導入に熱心で、その動きの一部として社交場である「鹿鳴館」が建設され、社交ダンスパーティーが行われた。ヤンソンは、農商務大臣であった西郷従道から日本の婦人に社交ダンスを教えるように要請された。



＝編集後記＝

今回の優駿会同窓会は、これまでとは異なる活性化した会にしようという試みで、総会を開催して同窓生の意見を徴集するとともに、同窓生による講演会を企画した。講演の内容はいずれも素晴らしい内容であり、是非とも在籍中の学生や院生にも聞いてもらいたかったが、若い年齢層の参加が今年と同窓会でもほとんどなかったのが悔やまれる。ヤンソン賞の設立も承認されたことから、来年度以降さらに有意義な活気ある同窓会とし、若い年齢層の同窓生や在籍中の学生・院生も参加してもらえればと考えている。

(優駿会幹事 堀 正敏)